

地域の中での施設の役割と連携 ～安心して生活することができる地域づくり～

熊本県 社会福祉法人寿量会
総合ケアサポートセンター天寿園
施設長 米満淑恵(老-22期)

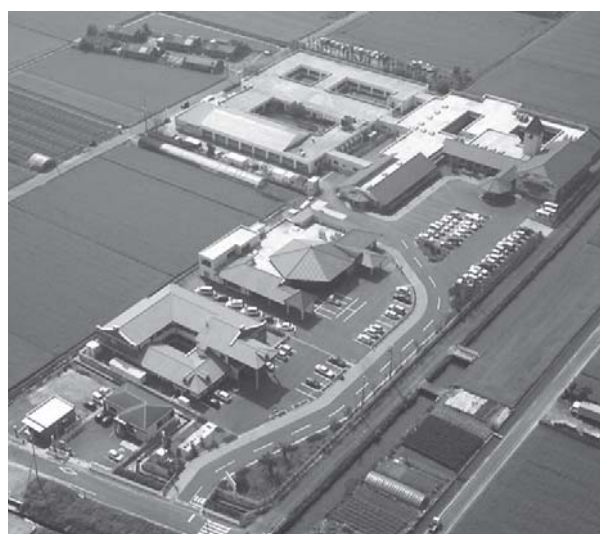
施設紹介

熊本市の南西部に、オレンジ色の屋根と海からの風を受けて四方に泳ぐくじらが目印の施設が、特別養護老人ホーム天寿園である。当施設は、平成2年に旧天明町(平成3年に熊本市と合併された)に設立された。

周囲は田畑に囲まれ、西には有明海と雄大な普賢岳がそびえ、夕刻には普賢岳の横に沈む太陽を望むことができる自然豊かな地域である。農業と漁業の町であり、核家族が多い現代において、当地域は、三世代家族が多い反面、高齢者の独居世帯も多いのが特徴である。

旧天明町の地域の人口は約1万人で、高齢化率は約30%である。

平成2年に、50床の特別養護老人ホームとデイサービスセンターが開設されて以降、入居者77名(ユニットケア)、ショートステイ18名、デイサービス、認知症対応型デイサービス(併設型、共有型、単独型)、ヘルパーステーションに加え、相談窓口として居宅介護支援事業所と在宅介護支援センターを開設している。また同敷地内には、リハビリテーションクリニックと通所リハビリテーション、22人が入居できるケアハウスがあり、平成18年には、県道を



天寿園全景

施設の概要

平成2年7月(設立時)

特別養護老人ホーム(50床)、デイサービスセンター設立

平成22年現在

特別養護老人ホーム(77床)

ショートステイ(18床)

デイサービス

認知症対応型デイサービス(併設型・共有型・単独型)

ヘルパーステーション

居宅介護支援事業所

在宅介護支援センター

【同敷地内】

ケアハウス(22床)

グループホーム(9床)

リハビリテーションクリニック

通所リハビリテーション

挟んだ向かい側に、グループホーム(虹の家)を開設した。

それぞれの時代の地域のニーズに応えることができるように努め、昨年、創立20周年を迎えた。

この20年を振り返り、地域の中の施設の役割と連携について考えてみたい。

地域連携のこれまでの経緯と現状

総合ケアサポートセンター天寿園では、『自由・自立・共生・共育』の理念のもと、さまざまな活動を通して地域との連携を図ってきた。ここで、いくつかの活動について紹介したい。

1. 入所者と地域ボランティアの交流

当施設には、地域の老人会女性部、天明ふるさと会、天明文化協会、地域の小学生をはじめ、多くの地域ボランティアの方々が入園されている。入浴後の整髪やシーツ交換等の生活援助に関わる方、歌や踊りを披露する方、入居者と小学生の交流など、ボランティアの形はさまざまでも、地域の皆様との交流を通して、入居者の生活は豊かなものになっている。

また、施設の中で誰かが来て手伝ってくれるのを待つのではなく、外へ出ることができる人は地域に出て行くことも大切である。廃品回収や草取りなどの地域の催事に職員と一緒に参加する、近所にある小学校へ集団登校する子どもたちに「おはよう」「いってらっしゃい」「気をつけてね」と声をかける等、何らかの形を残すものではないが、ふれあうことがお互いの支えになっていると思う。こうした積み重ねにより、小学校の運動会に招待いただいたり、公民館を

新築する際の餅投げに声をかけていただいたりと、より地域とのつながりが密になってきている。

当施設が地域に根ざすためにも、入居者にも地域の一員としての自覚を持っていただきたいと考えている。世代間交流をめざした取り組みを進めた結果、小学生との交流が入居者の生きがいとなっている様子もうかがえるようになった。してもら側からする側へ、地域の方々も入居者も、そして職員も、この地域ボランティアにそれぞれの立場で積極的に係わるようになったという変化が生まれてきている。

「施設で生活すること」、そのことが地域から隔絶されたものであるならば、そこに住む入居者は不幸ではないかと考えている。これからは地域力を拝借し、「住み慣れたまちで最後まで暮らす」ことのできる施設をめざしている。

2. 地区の高齢者や障害者の健康・生きがいづくり

在宅部門では、平成4年の在宅介護支援センター開設以来、地域の特に虚弱・要介護高齢者へのフォーマルなサービスの提供による支援、独居世帯や高齢者世帯を中心とする餅つき会の開催、地元老人会主催の介護者教室への職員派遣などにより、連携協力を図ってきた。

介護保険制度開始後は、居宅介護支援事業所による在宅での要介護高齢者支援を加え地域との連携を模索してきた。高齢者に対するサービスは質、量ともに充実してきたが、必ずしも在宅で生活を継続する高齢者が増えたとは言えない状況にある。在宅生活を継続するためには既

存の資源だけでは困難であり、地域で支える力、つまり住民の協力なしでは実現しないことを認識した。

そこで、地域力の構築・強化の方策として、平成17年度より「天明お達者計画推進事業」を開始した。事業の中心は、地域の各種団体の長を代表とした地域住民であり、当施設は事務局として後方支援に徹している。地区の高齢者や障害者の健康・生きがいづくりをめざして、これまでに、認知症介護予防出前講座、ふれあい交流会、各校区の公民館での健康教室、認知症見守りボランティア養成講座、地域住民と障害者のふれあい交流を図る「歴史探索ふれあいウォーキング」などを開催している。

これらの事業の運営は、介護予防や健康な生活の継続をめざす「元気高齢者づくり委員会」、高齢者から子どもまでまた障害のあるなしに関わらず人を大切にする心を育むための「ノーマライゼーション委員会」、認知症を地域で支え認知症になっても住み慣れた場での生活をめざす「認知症予防支援委員会」、この3つの委員会が行っている。

3. 高齢者SOSサービス

「台風の際に停電したけん、ひとりで恐ろしかった」

これは、今から約15年前に大型台風が接近した時に1人暮らしの高齢者が発した言葉である。この言葉が社会福祉協議会職員に届いたことをきっかけに、平成9年に高齢者SOSサービス事業が始まった。

この事業は旧天明町・旧飽田町に在住されているひとり暮らしの高齢者等を対象とし、台風などの災害時に協力施設である特別養護老人

高齢者SOSサービス案内ポスター

ホームや病院に、一時的な避難をすることにより高齢者等の日常生活の支援を行うものである。利用料は、食費のみ自己負担(朝300円・昼400円・夕400円)である。基本的には利用者の自主避難を原則とするが、必要に応じて協力施設や民生委員・児童委員などが連携を図りながら送迎を行う。

実際にこの事業で当施設に避難をした人数は、平成17年度が延べ20名、平成18年度が延べ30名、平成19年度が延べ27名であった。毎年、梅雨前に社会福祉協議会職員、校区社会福祉協議会会長、民生委員・児童委員、協力施設職員等が集まり連絡会を開催している。避難受入の体制や要綱を確認し、課題があれば話し合い、関係者が情報を共有する機会となっている。

事業開始当初は、周知不足のため避難者数も少なかったが、今では「台風が発生しました」というニュースが流れると、直ぐに電話をかけてこられる高齢者もいる。しかし、受入施設としては、どのような状況になった時に避難受入を開始するか状況判断が難しい。やや強い雨程度でも避難希望の電話があり、「もう少し様子をみましょう」との返事にも、「どうか、お願いします。廊下でもどこでも良かです。避難させてください」と涙ながらに訴える方もあり、災害時以外でもサービス利用となるケースがある。送迎や食事、布団の準備、民生委員・児童委員への連絡、介護保険対象者であれば、ケアマネジャーへの連絡など、一人の高齢者を受け入れるだけでも多くの協力と連携が必要である。時によってはスムーズにいかないこともある。しかし、この事業がひとり暮らし高齢者の心強い支えであり、安心につながっていると感じることができる。

「いつでも避難できる場所がある」、「何かあったときは相談しよう」と頼っていただけるような、地域住民の拠り所となる存在でありたいと思う。

4. 生活・介護支援サポーター養成講座

介護保険制度開始以降、施設サービスや在宅サービスは多種多様化し、高齢者支援は充実してきたかのように思われる。しかし、地域で生活をされている方の中には、サービスについて知らない、利用方法がわからないと話される方もいる。「ゴミ出しができない」、「1日1回安否確認をしてもらえたら…」等、日常生活のなかでのちょっとした困りごとを相談できずに悩んでいるのが現実である。

こうした問題の解決には、身近な地域住民の

サポートが必要である。地域住民の方々が介護保険制度や介護技術、高齢者の見守りや声かけのポイント等を知ることにより、地域で困っている高齢者の存在に気付いたり、「これなら私たちでも何かできるのでは…」とあっていただくことが、サポーターの第一歩になるのではと考えている。

そこで、平成21年度に生活・介護支援サポーター養成講座を計画し、全6回の講座(1回2時間前後)を2会場で開催した。内容は、介護保険制度を始めとし、高齢者の食事や生活面での見守りのポイント、認知症の症状等である。『出来る限り最期まで自分の足で歩く』ことを目的とした体操やフットネイルケア等も実施している。地域の老人会や自治会の方にも声を掛け、



生活・介護支援サポーター養成講座の様子(上下ともに)

【平成22年度「生活・介護支援サポーター養成講座」】

回数	開催日時	実施内容	開催場所	出席者数
			講師等	
第1回	平成23年 2月2日(水) 13:00～16:00	・開講式 ・介護保険を使うには(入口をしっかりと) ・足の健康維持とは?(フットケアについて)	特別養護老人ホーム天寿園 研修室	17名
			・南5地域包括支援センターサルビア センター長 白石 純 ・訪問フットケア 代表 築城 希美	
第2回	2月9日(水) 13:00～16:00	・認知症サポーター養成講座(公開講座) ・高齢者の健康(食事編)	特別養護老人ホーム天寿園 くじらホール	16名
			・認知症の人と家族の会熊本県支部 事務局長 富岡 大高 ・特別養護老人ホーム天寿園 栄養部 課長 永田 美香代	
第3回	2月16日(水) 13:00～16:00	・地域福祉の現状を知る! ・お年寄りの声かけ「いろは」	特別養護老人ホーム天寿園 研修室	15名
			・熊本市社会福祉協議会 地域福祉係 主事 中嶋 寿紀 ・グループホーム虹の家 管理者 村上 まゆみ	
第4回	2月23日(水) 13:00～16:00	・生活の介護マメ知識 ・高齢者の健康(運動編)	特別養護老人ホーム天寿園 くじらホール	16名
			・特別養護老人ホーム天寿園 地域統括部 課長 北崎 靖代 ・アスカスタジオ インストラクター 守田 有純佳	
第5回	3月2日(水) 10:00～12:30	・福祉のこれから(講演) ・介護の現場見学会(昼食付)	特別養護老人ホーム天寿園 研修室	17名
			・特別養護老人ホーム天寿園 施設長 米満 淑恵	
第6回	3月9日(水) 10:00～12:30	・地域交流会(お茶会兼意見交換会) ・開講式	特別養護老人ホーム天寿園 くじらホール	14名
			無し(司会進行のみ)	

プログラムに座談会を組み込み、楽しく受講していただけるような工夫もしている。全体で60名の方が参加された。

受講前は、6割の方が「実際に困っている方を見かけても、どこに相談をして良いかわからない」との意見であったが、受講後は近所の高齢者や支援が必要な方を見守り、気になることがあれば地域包括支援センターや福祉施設、民生委員・児童委員等に相談するようになった。地域行事に誘う、ゴミ捨での支援など、自分たちができることから始めようという想いが少し

ずつ広がっている。

5. 給食サービス

施設開設当初より、熊本市社会福祉協議会の委託を受け、熊本市生活支援型給食サービス事業を行っている。これは、ひとり暮らしの高齢者や高齢者世帯へ弁当を届ける配食サービスである。

弁当の調理を特別養護老人ホームの給食施設で行い、配食にあたっては、地域住民にボランティアを呼びかけ、顔なじみの方に配食してい

ただいている。利用者は、ボランティアの訪問と届けられる弁当を楽しみにしている。会話ははずみ、時には悩みごとの相談などもある。ボランティアは利用者の健康状態などの情報を、在宅介護支援センターへ伝えることにしている。

在宅の高齢者は食品数が少なくなりがちで、食事回数が減る人もいる。献立の内容は1食分としてはエネルギー量が高めになりがちであるため、使用する食品を多く取り入れられるように配慮している。季節感や行事に合わせ、イベント食にも取り組んでいる。

6. おもちゃ図書館てんじゅえん

当施設は平成2年に、「おもちゃ図書館てんじゅえん」を開設した。「縁側に高齢者が腰掛け、孫を膝に抱えて地域の方々と気軽に話ができる」といった、かつての日本で日常的に見られていた地域社会を再現する活動をめざしている。

現在は、子育てサークル「ぼれぼれ」、地域の小学校との交流会、障害児サークル「ありすの会」、「移動おもちゃ図書館」などを行っている。

「ぼれぼれ」は、施設入居者、子育て中の保護者、子どもの三世代で、遊びを中心とした活動を行っている。地域の主任児童員や、元保育士がボランティアとして活動している。

地域の小学校との交流については、小学校側から運動会等への招待がある。それ以外にも、当施設の庭で一緒に芋を育て収穫する等、多くの交流活動を展開している。

今後の課題

「ああ、年はとりたくない」、「ぼけたくはな

い」「家族や周りに迷惑をかけたくない」等の利用者の言葉をよく耳にする。それは、自分たちの将来に不安があるからであろう。

ここで、我が国の高齢化率等に関する将来的な数値を紹介する。政府の各種会議の資料によれば、2025年には高齢化率が30.5%、高齢者人口に占める認知症高齢者が10.6%、高齢者人口に占める要介護者が21.5%、65歳以上の世帯に占める単独世帯が35.4%になるとのことである。

このような数値を目の当たりにして、経済的な不安、病気に対する不安、ひとり暮らしになった時の不安、介護が必要になった時の不安が出てくるのは当然かもしれない。この不安が少しでも軽減できれば、長寿を楽しめる社会が生まれ、自分たちの将来を憂う言葉も徐々に消えていくのではないだろうか。

これまで、地域の方と接していく中で、地域にはさまざまな特技を持った方が多いこと、地域行事が多々開催されていること、住民の声は重要な情報源であることに気付いた。この情報源を活かすことで、私たちは施設の有する資源を地域に提供していくことができる。お互いが同じ場所に生活する住民として、相手を知り、理解し、協働することで安心して生活することのできる地域づくりが可能になると思う。

そのためにも、ほんの少しずつの前進かもしれないが、今回紹介をさせていただいた活動を継続していくことが必要であると思う。加えて、自分たちの将来は自分たちで考え、地域住民が主人公となるような地域活動を今後も考えていきたい。どのような状態になっても、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるようになるために。